

# 地場企業・団体の「チーム大分」

新型コロナウイルスと闘う医療現場で不足している衛生備品や機器を開発しようと、地場企業・団体が結成した「チーム大分」が21日、県庁で活動報告会を開いた。医師や看護師らが顔を覆うフェースシールドのほか、簡易型防護服の試作品を披露。今後、製造を進めると明らかにした。

フェースシールドは大分大医学部臨床工学センター(由布市)の穴井博文教授がフレームを設計。シエルエレクトロニクス(大分市)が3Dプリンターで試作品を作った。透明シートを取り付けて使う仕組みで、製品化を目指す。

防護服は協和包材(同市)が試作した。ポリエチレン素材で、エプロンと腕の部分を別々に加工することで容易に製造が可能という。6月から1日3千枚を生産す

## フェースシールド 防護服など生産へ

る計画。全国の業者が製造できるよう、同社ホームページで図面を公開している。

国産の医療用マスクの提供体制も強化。日本ヒューマンメディク(大分市)が兵庫県の工場と提携し、6月中旬以降に全国へ流通を始める。月10万枚を想定している。

チームのリーダーを務めるトクソー技研(宇佐市)の徳永修一社長は「まずは県内の医療機関で足りていない資材を調達しようと取り組んできた。地域、国内、世界へと貢献していきたい」と述べた。

報告を聞いた高浜航商工観光労働部長は「民間の方々からアイデアが上がってくるのはとても心強い。第2、3弾を期待している」とエールを送った。

(船山善弘)



フェースシールドや簡易型防護服の試作品などを発表した「チーム大分」のメンバー＝21日、県庁